

歌壇 俳壇



〈ゲットウIV〉 日高理恵子

高野公彦選

訪露してロシアの勝利を信じると言いし日本の国会議員 (観音寺市) 篠原 俊則
包丁の手を止め火を止め息を止め草葉雀啼く朝のキッチン (中津市) 瀬口 美子
食べない期間、祖母のいない時間となりしすいきの炊いたん (奈良市) 山添 聖子
啄木の三倍生きて花屋の前通りすぎけりある歌思 (大和郡山田市) 四方 護
中秋の家族カラオケ大会の優勝は母澄んだユーム (富山市) 松田 梨子
みどり尻を抱けば甘き匂ひせり生きゆくため (八尾市) 水野 一也
筋無力症の友のそだてし新米はしがつよくてとるりとあま (盛岡市) 山内 仁子
生きるためどんな仕事も厭わずにきたこととを財産とする (三郷市) 木村 義照
漢字四文字の姓に憧れ列拳せり武者小路万里小路勅使河原長曾我部 (船橋市) 佐々木美彌子
☆百五十人分お抹茶の裏(し)をしました学園祭 (奈良市) 山添 葵
の前日

【評】一首目、「なぜそんなことを」と呆れた日本人が多かったのでは？ 二首目、小さい秋の、澄んだ鳴き声。三首目、祖母の作った芋茎の炊いたのを懐かしむ心。四首目、「友がみなわれよりえらく」の歌を思いつつ彼我の人生を比べる作者。

永田和宏選

母さんはもの書きになるには闇が足りないよ娘が言う隠せているのだよ (呉市) 今泉 洋子
「レカナマブ」承認された薬の名忘れの前に覚えられない (千葉市) 本原 美穂
ビザの味ソーセージの味牛の味を知るわたし熊でなくてよかった (稲沢市) 伊藤 京子
なんだみな同じ思いか旺文社赤尾の「豆単」復刻版ある (大和郡山田市) 四方 護
駅前の更地となりし古書店のはたきの親爺の今を思えり (観音寺市) 篠原 俊則
人はいつか死ぬの薄いソノシートダークタックスぞうさんも吾も (吉川市) 竹之内 桂
虎キチで里騒がせし亡き夫の名を人ら言う阪神勝ちて (飯田市) 草田 礼子
父がいつも母に隠れて呑んでいた酒屋の横のベンチなくなる (佐世保市) 近藤 福代
鉄橋をわたる列車の影射えて溪の水澄む仙山線は (仙合市) 沼沢 修
☆百五十人分お抹茶の裏(し)をしました学園祭 (奈良市) 山添 葵
の前日

【評】今泉さん、私が裡に持つ闇は娘にも気づかれないようにと、哀しい安心。空原さん、アルツハイマー新薬。忘れる前に覚えられないとは、言い得て妙。伊藤さん、なまじ牛やビザの味を覚えたらばかりに射殺される熊。OS18が死んだ。

馬場あき子選

秋の月太るころまで存牛らはネッククーラー巻かれ乳飲む (稲沢市) 伊藤 京子
短歌では嘘はついてもいいよと後方智氏が楽しく語る (千葉市) 甲本 照夫
店員の腕に爪立てからみつく大イセエビの腹筋強し (三鷹市) 大谷トミ子
☆百五十人分お抹茶の裏(し)をしました学園祭 (奈良市) 山添 葵
の前日
「おひとりさま」と案内されしは隅の席ふたりの席は空いているのに (豊中市) 夏秋 淳子
獣体の遺骨が届く郵便で時代もそごまで来たかと溜め息 (福島市) 澤 正宏
☆どたととと園児駆ければ川岸の亀が飛びこむ (知多市) 佃 尚美
大が逝き山羊を飼いはじめた人の道草ばかりで散歩にならず (松阪市) こやまはつみ
江戸城の中を見たしと猛暑日に外国人客長蛇の列なす (町田市) 山本喜多男
古稀の旅ウィーンの町にアヴェマリア弾きぬ (市川市) 吉住 威典
シヨパンの碑に合掌す

【評】第一首は今年の異常な暑さゆえの対処法。存牛が飲む乳の量が減らないようにとネッククーラーが十五夜近くまで用いられていた。第二首は作歌の秘伝？の面白さ。第三首、大イセエビも必死の抵抗。腹筋は作者の感覚的比喩。

佐佐木幸綱選

ひつそりと良寛揃ふ古書肆あり吟味しつつも四冊買ひぬ (沼田市) 堤 一巳
「唯生きてある」と記しし同年の荷風の日記に傍線を引く (東京都) 豊 万里
☆どたととと園児駆ければ川岸の亀が飛びこむ (知多市) 佃 尚美
どぼんどぼんと (知多市) 佃 尚美
シミリスは終に泳ぎぬ水面に浮かぶ木の実に尾をゆらしつつ (横浜市) 吉川 米子
田や畑に神出鬼没の猿なれど村人はそをあんちゃんと呼ぶ (熊本県) 守田 くみ
最期まで農に慣れず逝きし母愛したリンドウ段畑に咲く (安芸高田市) 安芸 深志
暑き夜を涼しまんとなす志ん朝の「お化け長屋」を聴きつつ寝入る (七尾市) 田中 伸一
秋の日のローズマリーの花のまをすするりするりとカナヘビがゆく (仙合市) 小室 寿子
包装紙裏にびっしり帰りたいスマホを持たぬ母の入院 (東大阪市) 大野 聖子
コミックの書架三連がダンボール二十八個となりて運ばる (大阪市) 末永 純三

【評】第一首、良寛を何冊も読み込んでいる作者だろう、古書肆を表現して「ひつそりと」が味わい深い。第二首、永井荷風『断腸亭日乗』に人生を読む、そんな年齢になったの意味だろう。第三首、「どたとと」と「どぼんどぼん」の対比の妙。

俳句時評 ふくらみある言語世界

阪西 敦子

俳人・文芸評論家の恩田侑布子の評論集『星を見る人 日本語、どん底からの反転』(春秋社)には、2013年から発表された評論が集められている。取り上げられている作家は、松尾芭蕉から現代の作家まで幅広い。

例えば飯田蛇笏。「蛇笏賞」にその名を残す大正から昭和を代表する俳人の一人だ。自然に根差した視点と格調の高い表現でその作品が知られているが、恩田はその句境に「多声音楽」を見いだす。

「死病得て爪うつくしき火桶かな」は芥川龍之介が感嘆し、この句を剽窃して作ったとする「傍がいの類美しや冬帽子」と対比して読み解く。芥川の句が深く被った帽子と頬の組み合わせを言ったのみに対して、蛇笏の句では、火鉢に置かれた病人の爪の美しさを見せたその先に、「うつくしき火桶」のつながりからその爪の置かれた火鉢へも美しさをつらね、「かな」によってその「美の奥」へ導くという、句の中の重層を指摘する。

久保田万太郎の代表句「竹馬やいろはにほへとちりく」には、竹馬で遊ぶ子供たちがちらはって行く様子、家路に消える様子、その友たちの行方、そして、いろはのたの無常観へと、重層を読み取る。実景から思念へ継ぎ目のない展開が心地よい。

あとかぎで「よろこびは計算されない。抒情は捨てられた場所に生まれる」と恩田は書く。病の家居や子供の小さな別れを描きながらも、ふくらみある言語世界を作り出す俳句。その言葉の力を改めて捉え直し、言葉の溢れる現代における俳句の意義を問う。

第69回角川短歌賞 角川文化振興財団主催。東京大学Q短歌会に所属する渡邊新月さん(21)の「楚樹(しもと)」(50首)に決まった。

川野里子歌集「ウォーターリリー」歌誌「かりん」編集委員による第8歌集。「睡蓮の気持ちは人類誕生以前から変はらないまま会へない人よ」(短歌研究社・2420円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

風信